

Go Down, Moses 試論 I

－Mollieを中心にして－

太田直子

I

第一次世界大戦が勃発した1940年頃、景気低迷の余波がFaulknerの故郷Oxfordにもうち寄せてきた。Oxfordの鉄道が廃線となり、町の古いホテル等の建物が壊されていった頃、Faulkner自身の経済状態も同様に困窮していたばかりでなく、個人的、家庭的にも波乱の数年が続いていた後であり、作品としても目立ったものは書かれていなかった。出版社に宛てた手紙には契約金など金銭的な話題が多く見られ、生活資金繰りで苦勞していたFaulknerは、精神的にも悲観的な日常であったように思われる。この状況を打破すべく、Faulknerは「出版すべき作品がある」ことを出版社に手紙で訴えている。

Also, Ober has four stories about niggers. I can build onto them, write some more, make a book like THE UNVANQUISHED, could get it together in six months, perhaps.⁽¹⁾

1940年5月にRobert Haasに宛てたこの手紙の内容は、その2ヶ月後の1940年7月28日のBennett Cerfへの手紙の中で再び話題にされているが、“One more story will complete a mss. based on short stories, some published, something like the UNVANQUISHED in composition.”⁽²⁾と新しい小説への構想を再度表明しているものの、未だに*The Unvanquished*に類似したものの域を出てはいない。

それから10ヶ月後の1941年5月1日のHaasへの手紙の中で、Faulknerはようやく新しい小説の構想について具体的に示している。

Dear Bob:

Last year I mentioned a volume, collected short stories, general theme being relationship between white and negro races here. This is the plan:

Title of book: GO DOWN, MOSES

Storied:

THE FIRE AND THE HEARTH

Part One: published collier's

” Two: Atlantic Monthly

” Three: Unpublished.

PANTALOON IN BLACK: Harper’s

THE OLD PEOPLE: ”

DELTA AUTUMN: Unpublished.

GO DOWN, MOSES: Collier’s ⁽³⁾

タイトルをGo Down, Mosesとしたこの作品は、*The Unvanquished*と同様に、既成の短編に加筆し改訂したものに、同一系統の他の短編を再配列し、さらに、異系列の短編を加えることによって、1941年12月半ばに小説化が実現し、1942年5月に出版する運びとなった。

*Go Down, Moses*はIssac McCaslinの狩猟物語を中心とした三部作、“The Old People,” “The Bear,” “Delta Autumn”をそれぞれ第4, 5, 6章に配置し、それを含め、第1章“Was,” 第2章“The Fire and the Hearth,” 最終章“Go Down, Moses”には、Lucius Quintus Carothers McCaslinを祖とし、その血をひく白人と黒人の物語が書かれているが、第2章ではMcCaslinとは無関係と思われる男、愛妻を失った一人の黒人の悲劇的な物語が挿入、設定されている。

構想の段階で、“general theme being relationship between white and negro races here.”⁽⁴⁾とFaulknerが語っているように、*Go Down, Moses*はYoknapatawpha Sagaの主題と構造を持ち、さらに彼自身が“the Huckle Finn novel”と称する要素をもった小説として完成した。原罪を犯したCarothers McCaslinの直系白人男子Issac McCaslin、女系白人男子Edmonds、そして黒人系男子の曾孫Lucasという、同じ血族の中における人種問題が、単なる人種問題とは異なる構想と葛藤の悲劇を描き、さらに、原罪を犯した先祖の土地を継承することを拒んだIssacの荒野へのイニシエーションというFaulknerの原始主義論をも垣間見ることができる。

Paternalismの南部社会の中で、男性にはその人なりの分相応の“space”が与えられている。一族の所有する限られた“space”の中で、男性登場人物はそれぞれの“space”を持ち、その“space”の範囲と境界を巡って苦悩、葛藤を続けていると考えることができる。

小論では、各登場人物の“space”に注目し、自ら特異の“space”を持つことによって苦しむ男性像を比較する一方、全く違う観点の“space”を持つ、または“space”を持たない女性、Mollie (Molly)⁽⁵⁾に注目し、彼女の生き様を通してFaulknerの持つ人間論理を考察していきたい。

II

Faulkner が作成したYoknapatawpha Countyの図の中には、町の様子と共に、白人、黒人の人数がそれぞれ記録されている。白人と黒人と二つのカテゴリの中に町の人すべて

が分類されているとこの事実は、複雑な人種問題をいかに白人が一番単純な基準の中に組み込んでしまったか、そしてそうした基準の中で人々が実際に生活していた南部の社会状態を読みとることができる。

Faulknerの代表的な短編、“That Evening Sun”の中で、主人公Nancyの夫で黒人のJesusは、“I cant hang around white man's kitchen,” “But white man can hang around mine. White man can come in my house, but I cant stop him. When white man want to come in my house, I aint got not house.”⁶⁾と、白人に犯される自分の“space”についてこのように述べている。白人が自分の“space”に入ってくると、そこは直ちにその白人の“space”となり、自分の居場所がなくなるという黒人の嘆きがJesusの口を通して語られているように、黒人は誕生したその時から、白人の支配を受け制約を受けることになったが、奴隷制度が存続している間も、支配されながら黒人たちは自分たちの“space”を作っていった。逆に、奴隷解放の後、黒人は「自由」を手に入れた反面、逆に人種問題の風をまともに受け、逆に不自由さを実感し従来と異なった虐待と差別の歴史を持つことになったのである。同じ先祖をもちながら体内に分流する黒い血のために、決して同列に座ることができない血族の人間は、血の分流を持たない黒人よりさらにもっと複雑であり悲惨な存在であると思われる。Go Down, Mosesに登場するLucasは、自分の中に存在する白い血を全く否定する形で人生を送らざるを得ないのである。

密造酒を密かに作り続けるLucasは、黙々と自分の畑を耕す黒人老人として作品に登場する。単なる黒人の老人として登場するのであるが、密造酒の蒸留器を隠し通すことができなくなった地点から、Lucasの描写はコミカルな様相を呈し始める。何とか自分の蒸留器を手放さなくてもすむように、自分の娘までも利用し、娘への結婚を餌にGeorge Wilkinsを仲間に入れようと画策する。Joel Chandler Harrisの『Uncle Remus物語』にも登場するTricksterの姿にも似たこの黒人老人の素性は、“The Fire and the Hearth”の第3章になって初めてあかされる。この老人がEdmondsと同じ血を持つ人間であること、つまりは、Lucius Quintus Carothers McCaslinというこの一族の祖の孫として生まれたLucas Beauchampは、Go Down, Mosesの主人公といえるIssac McCaslinよりも一代McCaslinに近い存在でありながら、黒人の母を持つ系統に生まれたことにより、肌の色など、視覚的なものはすべて無視され、当然黒人として生きることを強いられていることが、Edmondsに語らせることによって読者に明らかにされていく。

Now the white man leaned in the window, looking at the impenetrable face with its definite strain of white blood, the same blood which ran in his own veins, which had not only come to the negro through male descent while it had come to him from a woman, but had reached the negro a generation sooner - a face composed, inscrutable, even a little haughty, shaped even in expression in the pattern

of his great-grandfather McCaslin's face.¹⁷⁾

“Lucas Beauchamp is white injustice to the Negroes.”¹⁸⁾と言われるように、Lucasの人生は、白人の罪の償いをあらわしているようでもあるが、白人の血を受け継いでいることを否定し、黒人として生きることを選択したLucasは、全く一族の関わりのない町の女性 Mollieと結婚する。自分のアイデンティティを立証するために、彼は経済的な自立という理念を持って生きていくことを考えていた。しかし、自分に与えられた貯金を白人の管理に委ね、Zachary Edmonds (Zack) からもらった暖炉の火を“domestic symbol”として結婚以来燃し続けることで、自分がMcCaslinの血を受け継いでいることを証明すると共に、逆にその為に自分の“space”を犯される危険性をはらんでいたのである。

白人系子孫のZackの妻が出産時に死んでから半年、乳飲み子を抱えたLucasの妻Mollieは、Edmonds家に行ったまま返されなかった。半年間、屈辱感にさいなまれながらも何も対処できなかったLucasであったが、とうとう“I want my wife. I need her at home,” (42) とZackに妻を返してくれるように頼みにいくが、そのLucasの言葉にZackは、“What kind of a man do you think I am? What kind of a man do you call yourself?” (42) と白人と黒人の優劣、つまり、白人の“space”の広さを強調する。白人の“space”が自分の家族の中までも浸食していることを実感したLucasは、“I’m just a nigger....But I’m a man too. I’m more than just a man. The same thing made my pappy that made your grandmaw. I’m going to take her back.” (42) と言い残しその場を去る。彼の望み通り妻は家に帰ってきた。以前のように暖炉からは煙が立ち上り、夕食の用意がなされていた。McCaslin Edmondsがくれたこの家の柵をあけて家の中に入り、今までは妻によってきれいに除草されていた庭が掃かれることもなく放置された様子を見て、Lucasは憤りを新たにする。さらに、家の中に入り、妻が何事もなかったかのように過ごし、片手に白人の子供を抱えている姿を見たとき、今までの不信感、憤激が一気に爆発する。自分の元から何の了解もなく妻が白人の“space”の中に取り込まれ、それに対して6ヶ月間、何も手を尽くすことができなかったことと、妻が戻された後には、柵で囲っていた自分の“space”はすでに白人によって犯されていたことによりやく気が付いたLucasは、カミソリをもってZackの寝室を訪れるが、結局、彼を殺して屈辱を払うことはできなかった。

白人の屋敷にある柵は、見た目よりも高く黒人のLucasには越えられないものであった。高い柵は、歴史、社会が培った白人の“space”の強力な権威を象徴している。白人であれば妻を巡って決闘をすることもできるが、黒人の彼には許されないのである。“McCaslin Blood”というとうに自分の中では捨ててしまったはずの血が、Lucasをさらに苦しめ、そして憤らせていった。結局、Lucasは、この6ヶ月という時間が存在しなかったかのように生活を続けなければならなかった。自分の家族、時間、そして守っていたと確信していた“space”は、白人によってすべて犯され、踏みじられたことを実感した。

祖父McCaslinの犯した原罪は、常に現在に収斂され、現在に流れ込む過去の重い時間だ

けが存在していた。白人男性社会の中で、黒人男性はその行動範囲、人間として権利を浸食され、そのわずかに残された“space”の中で生きることで一生を全できるのである。

III

*Go Down, Moses*の白人男性社会、Paternalismの中で、黒人男性と同様に白人女性は表面に出てくることがない。McCaslinの家系の中で、ほとんどの白人女性はその名前さえも記録されていない。これとは対称的に、社会的に最下層に位置付けられた黒人女性が、この作品の中では生き生きと活動していることは注目に値する。

Lucasは、自分の“space”にこだわり、それを保持すること、果てはそれを放棄することで一生を費やしたといってもよいであろう。男たちが“space”に固執し、葛藤を繰り返している間に、それを飛び越え、どの“space”へも抵抗なく入り込んでいくのが黒人女性である。社会生活の水面下で生きる彼女らであるが、その行動範囲は実に広く、物語の展開に大きな影響を与えている。Lucasの妻Mollieはまさしく黒人“space”をすり抜けて豪然と生き続ける黒人女性の代表であるといえよう。物語におけるMollieの行動は、3つの事件に見ることができる。第一は、Lucasが屈辱感にさいなまれた6ヶ月間である。Lucasが洪水の中、医者を呼びに行っている間に、MollieはEdmondsの妻の出産に立ち会い、その死を看取ったその瞬間から、産まれたばかりの赤ん坊の母親役を担うことになった。夫が医者連れて戻ってきたときには、すべてが決まっており、Mollieは当然のごとく白人の“space”の中に収まっていたのである。子供を産んだばかりの妻が一瞬の内に白人の“space”の中に吸収され、しかも自分の子供までもが彼の手の届かない“space”へと入っていったことに対して、Lucasは最初何も考えることができなかつたのである。Lucasのその時の驚きは次のように表現されている。

It was as though on that luring and driving day he had crossed and then recrossed a kind of Lethe, emerging, being permitted to escape, buying as the price of life a world outwardly the same yet subtly and irrevocably altered. (41)

Lucasの驚きとは別に、何事もなかつたかのように、悠然とEdmondsの屋敷で白人と黒人の二人の乳飲み子を育てるMollieにとって、不自然感はないのである。

Faulknerの描く白人一家には*The Sound and the Fury*のMrs. Compsonに代表されるように、母親不在がテーマの一つになっている。しかし、その一方で、Compson家を支える黒人Dilseyのような母親代行の存在が大きい。さらに*Light in August*のLena Groveのように孕んだ身に、距離的、時間的に無限の未来を象徴する女性像は、Faulknerの描く世界の希望や救いになっているのである。FaulknerはMollieにもその二つの要素を持たせて

いると考えることができる。

従って、6ヶ月後にMollieはすぐさまLucasの“space”へと溶け込み、時間の流れが存在しなかったかのように、すべてが元通りになったかに見える。ただ、以前と違うのは自分の子供のほかに白人の子供を一緒につれてきたことだけであった。しかし、Lucasが憤りを感じるこの事実も、Mollieにとっては自然のことであったのだ。“McCaslin Blood”が流れるLucasとは異なり、黒い血だけを持つ黒人女性は、閉鎖する必要がある“space”ももっておらず、与えること受け入れるという無限性が彼女の生の常数であった。こうした女性の無償の想いが、決して黒人の血を受け入れない白人男性の生活領域にも達し、彼の健康や精神に対して配慮を細かにしてその“space”に入り込むだけではなくて、“...who had given him, the motherless, without stint or expectation of reward that constant and abiding devotion and love which existed nowhere else in this world for him.” (96) との存在として白人の子供の心の中にも大きな位置を占めることになるのである。このように、すべての者を受け入れ、自らの意見を主張することなく生活をするMollieであるが、次の2つの事件においては、非常に強い自己主張をするのである。

Zackが死に、Mollieの育てたCarothers Edmonds (Roth) が42歳になったとき、Mollieは45年間連れ添ったLucasとの離婚を申し出る。

‘- stays out all night long every night with it, hunting that buried money. He don’t even take care of his own stock right no more. I feeds the mare and the hogs and milks, tires to. But that’s all right. I can do that. I’m glad to do that when he is sick in the body. But he’s sick in the mind now. Bad sick. He don’t even get up to go to church on Sunday no more. He’s bad sick, master. He’s doing a thing the lord aint meant for folks to do.’ (84)

金探しに熱中するあまり、自分たちの末娘の婿までも引きずり込んでしまった夫Lucasに対する忍耐の限界に達した Mollieは、彼の心を入れ替える唯一の手段が離婚であると考えた。物質的欲望に目がくらんだ夫に、何も要求しないで彼の側を離れることが、誰の意見にも耳を貸さない夫への無言の抵抗であった。彼女は、神の持ち物である土の中から金を取りだし、それを自分のものとしようとする彼の欲望が、神の怒りに触れることであると恐れているのである。

21歳で祖父からの遺贈金を持ち、20年にもわたってEdmondsの屋敷内に蒸留器を隠し持ち、Edmondsの驟馬と引き替えに今度は、金策器を手に入れた。妻を6ヶ月間白人に盗られたあと、Lucasは黒人として自分の内に分流する白い血を否定して生きてきた。着実に自分の“space”を広げていったLucasであるが、その“space”は決して安全なものではなかった。ひそかに広げられたLucasの秘密の“space”を恐れたMollieは彼の“space”の

中から出ることでそれを修正しようと試みたのである。自分にとっては母のような存在であるMollieのこの衝撃的な申し出に対して、Rothは激しい憤りをおぼえた。この年齢になって何もかも捨てて出ていこうとするMollieに同情し、自らLucasを諫めることを約束する。

Lucasは呼び出されるが、

'I'm a man,'...I'm the man here. I'm the one to say in my house, like you and your paw and his paw were the ones to say in his. You aint got any complaints about the say I farm my land and make my crop, have you?' (42)

と、彼は、自分の“space”を保持するために父親Edmondsに主張するよりもはるかに強く戦いを挑む。42歳の白人Rothは67歳の黒人Lucasに白人の立場で話をするが、Lucasは相手の心底を見透かすように話を進めていく。Mollieはこの二人の言い争いをききながら、夫が決して改心することがないことを見抜いてしまう。二人の言い争いは、さらに激しくなり、お互いの自分の立場に固執して止むことを知らない。自分の意のままにならないLucasと自分自身に対する苛立ちから、おわりにはRothは白人の持つ高慢さからLucasに命令する他の術を知らない。かたくなに“space”を守り抜こうと主張するLucasと、この世のたった一人の母とでも呼べるMollieに対する同情から彼女の苦痛を取り払うためにLucasを説得しようと最初は試みるものの、結局は、白人の立場を利用して、白人の“space”を黒人のそれに押しつけることになってしまうのである。

42歳のRothにはLucasを言い含める力はなく、彼はMollieの希望をかなえる為に提訴する。裁判所に離婚を申し立て、Roth自身が彼女を扶養することを裁判長に申し出たとたんに、Lucasは、“We aint gonter have no contest or novoce neither,” “I done changed my mind.” (104) と Rothの意向を受け入れた。つまり、Mollieは白人に自分の夫との関係を促すことによって、彼の心の変化を促した。

Mollieは夫に対する要求を、離婚を申し立てるという手段でもって彼に承諾させて、Lucasの“白人願望”の“space”への欲望を断ち切り、Mollieを自分の“space”の中で扶養することを決心するのである。2人の男が誇示する“space”を開かせることができたMollieの力こそ、“space”に固執しない人間の性の勝利と言わざるをえない。自分の潜在力の自負や自覚を持たない黒人女性Mollieは、男の“space”を左右する存在として描かれていることがわかる。このMollyが晩年、さらに社会に向かって挑戦するその三つ目の事件が、*Go Down, Moses*の最後の一編、“Go Down, Moses”で語られる。

IV

離婚問題が起こった後の夏、Gavin StevensのもとをMollieが訪ねる。“‘Roth Edmonds sold my Benjamin. Sold him in Egypt. Pharaoh got him -’” (278) とStevensに話し、自分の孫Samuel Worsham Beauchampを探すように訴えた。Samuel Worsham Beauchampは、MollieとLucasの長女の息子であり、母と死別し父が彼を捨てたためにMollieが育ててきた黒人青年である。その父親の性格を受け継いだ凶暴な少年Samuelは、19歳の時に家出をして事件を起こしていたのである。

面識もないこの女性の“the old Negress’s instinct,” (280) を信じたStevensは、磁石に吸いよせられるようにMollieの訴えに耳を傾ける。黒人の老女を助けるために白人Stevensが思いつくことはまず、Mollieの夫が小作農をしているRoth Edmondsに電話をかけることであった。黒人女性の本能を信じながらもその話を白人に確かめずにはおれないというこの行為は、黒人の“space”を白人が所有しているという考えから出てきているものであると言えよう。Samuelを追放したことを彼女の口から知り、離婚問題でMollieに力をかし、保護したRothであったが、いくらMollieの育てた孫であっても素性の悪い者を自分の回り、つまりは自分の“space”に近づけたくはなかったのである。自分の屋敷の売店に盗みに入った現場を捕まえると、屋敷から出ていくように命令し、二度と帰ってくることを禁じた。受け入れられない者に命令し、追放するというこの形が、警察でもなく一個人の白人によってなされるというこの事実は、“space”への侵害に対して鋭く反発する自衛的本能を示すものである。

自分に害のある黒人を排除する。その人物を遠ざけることで解決したとするこの独善的な考え方は、“That Evening Sun”におけるCompsonの態度にも見ることができる。Nancyの夫Jesusを自分の屋敷に立ち入ることを禁止し、Jesusを恐れるNancyの助けを最終的には拒否してしまう。父権主義的なこのCompsonの態度は、まさしくこのRothのLucasへの高圧的な態度と、軌を一にしている。

誰にSamuelのことを頼むべきなのかということMollieははっきりと認識していた。離婚問題の時はRothへ、そして今回はお人好しのGavin Stevensと、実に上手に使い分けているが、意図的、作為的とは決して思われないMollieのこのような行動は、本能とも、先祖から受け継いだ「血」の中にある生活する知恵としてとらえることができる。これこそ流動的ではあるが実には的確に白人の“space”へと近づき、いつの間にかその中に入り込んでしまうという彼女の実相を実に如実に現しているといえる。

Edmondsに問い合わせることをやめたGavinは、友人の編集長Wilmothに情報を求める。

Mississippi negro, an eve of execution for murder of Chicago policeman, exposes alias by completing census questionnaire. Samuel Worsham Beauchamp - (281)

WilmothからSamuelの処刑を知らせを入手したStevensは、Mollieが今身を寄せているMiss Worshamの元を訪ね、事実を伝える。Miss Worshamは父親の残してくれた家に、父親の奴隷の子孫のひとりであるHamp Wrshamとその女房の助けを受けながら鶏や野菜を育てては市場に出して生活をしている女性である。彼女と黒人のMollieは同じ月に生まれ、Mollieの息子とRothがそうであったように、姉妹のように育ったのである。Miss Worshamの家は、まさしく、黒人と白人の“space”が同居している場所であった。白人男性のように“space”を主張することがないこの穏やかな“space”の中で、Samuelの処刑が知らされることには、大きな意味があるように思われる。“some old, timeless female affinity for blood and grief”を持つMiss Worshamは、“She will want to take him back home with her.” (282) と彼女の気持ちを代弁する。

霊柩車と花を準備して、遺体を家に連れて帰ることを約束してしまったStevensは、甲斐甲斐しく面倒をみることになる。こうしてMollieの思い通りにSamuelの遺体を彼女の元に戻してきたのであるが、ここでまた彼女は、白人男性が予想もしない希望を出す。

編集長のWilmothに協力させる際、Stevensはこの事件を記事にしない旨を約束させた。これがStevens流のMollieへのいたわりの行為であったのだが、Mollieの想いは全く別なところにあった。“Is you gonter put hit in de paper? I wants hit all in de paper. All of hit...” (288) と孫の記事を新聞にすべて載せてほしいという彼女の強い意志は、白人男性たちを驚かせた。字が読めないにもかかわらず、Mollieがそう要求したことにStevensはようやくMollieの願いを理解するのである。

It doesn't matter to her now. Since it had to be and she couldn't stop it, and now that it's all over and done and finished, she doesn't care how he died. She just wanted him home, but she wanted him to come home right. She wanted that casket and those flowers and the hears and she wanted to ride through town behind it in a car.... (288)

白人父権社会機構の中で、彼女にまつわる事件はすべてうやむやのまま処理されてきた。6ヶ月の白人屋敷での生活は夫Lucasに疑惑を持たせたが、白人の“space”に押し切られた形で夫は何も問いただすことができなかった。離婚問題にいたっても、Rothの介入によって、最終的には白人と黒人の“space”をめぐる争いのひとつとなり、それも何の解決もなく終わってしまった。すべて彼女の身の回りにおきた事柄は、白人、黒人男性の“space”問題にすり替えられ、Mollie本人の納得する解決法には至っていない。

Rothに孫を売られてしまったと信じているMollieは、孫をどうしてもこの手元に戻したいという母親の気持を表しているといってもよい。どこの“space”でもなく自分の手元に戻すことが彼女にとっての解決方法であった。それも内密に処理をするのではなく、すべて

を公表することで孫の最期も彼女の納得のいく決着となったのである。三度目に訪れたこのチャンスにMollieは、さらに強く自己主張することによって、水面下で行われている白人と黒人の“space”の争いに巻き込まれることなく、黒人の孫を永久に手に入れることに成功するのである。

V

*Go Down, Moses*は、Faulknerの乳母Caroline Barrに捧げられた作品である。

TO MAMMY
CAROLINE BARR
MISSISSIPPI
(1840-1940)

*Who was born in slavery and
who gave to my family a fidelity
without stint or calculation of
recompense and to my childhood
an immeasurable devotion
and love*

1940年になくなったFaulknerの乳母Caroline Barrは、Faulknerの生まれる前から、“house servant”としてFalkner家に仕えていた。Faulknerには白人と黒人の二人の母がいたと言われている。Caroline Barr, Mammy Callieの存在の大きさは、Faulknerの一人娘Jill Summersの次の言葉でも明らかである。

I think that Mammy Callie took her place in Pappy' life. Mammy had been his mother, his nurse, his teacher, and everything else for so long. She was the only person in the world who's ever called Pappy a nickname, that I know.⁶⁹⁾

黒人Mammyに対するFaulknerの暖かい感情は、*The Sound and the Fury*のDilseyと“*Go Down, Moses*”のMollieの描写に読みとることができる。白人のPaternalismの中で記録されることなく一生をおくる黒人女性とは異なり、Faulknerの描くMammyは個性を持ち人間としての尊厳をもって描かれている。白人男性と黒人男性の“space”に挟まれ堪え忍びながらも常に新しい物の考え方に対応していくこのMollieの姿は、FaulknerのMammy Carryeに対する愛情であり、救いであったのかもしれない。離婚問題、孫の遺体の引き取り

と次々と自分の意志を通していくMollieであるが、白人男性にとって敵対する存在ではないのである。白人、黒人の区別なく自分に与えられた役割を献身的に熟し、白人、黒人の“space”の中に自由に入出入りすることで、多くの試練にも耐えてきた。そうした彼女の一生は、白人Paternalism社会の中でその一生の寛容さと献身さによって保護されて報いられるのである。そして彼女自身は、“race” “gender”の枠を越えてその中で生きてきたのであった。FaulknerのMammyがそうであったように、“Go Down, Moses”のMollieが白人と黒人の子供に囲まれて平穩に終わりを迎えられそうな暖かさが作品の最後に余韻を漂わせている。しかし、Faulknerは、Mollieに対して、新しい女性像を求めてはいなかったのである。未だに歴然と人種差別、性別の明白な差別と制限の残る“space”の存在する社会の中で生きてきた彼女に対する敬意が最後に書かれることによって、この作品がMollieに捧げられていることが理解できるが、これをもってFaulknerは懐古主義的な社会観、歴史観を求めていたと断言することはできない。

Mollieに対して、未来の女性像を託しているとは考えられないが、Faulknerは作品の中で、確実に新しい女性の姿を描いている。“Delta Autumn”の中で、主人公の老人Issac McCaslineは一人の女性の訪問を受ける。男性用の帽子、レインコートを着て長靴を履いた女性が入ってきた。彼女はCarothers Edmonds、つまりMollieの育てたRothの子供を生んだ女性であった。しかも、IssacがMcCaslin家の原罪と認識するCarothers McCaslinと黒人の妻Eunice Thucuyousとの子供Tomasinaと父Carothersとの子、Tomy's Turlの曾孫にあたる女性であった。Rothは、この女性の素性を知らずに彼女との子供を儲けるが、この女性は明らかにこの事実を知っていた。Issacにとっては考えられないほどの屈辱と絶望を味わうこの事実ではあるが、この女性にとっては、何の罪の意識も迷いもない。Mollieが白人の“space”へなんの不自然さも感じないで溶け込んでいったのと似て、この女性には“space”というものは存在しないのである。

彼女が黒人であること、そして黒人女性の典型的な仕事、洗濯女をしていたこと、次々と明かされ彼女の姿に打ちのめされているIssacに、この女性は堂々と次のように述べる。

‘Old man,’ she said, ‘have you lived so long and forgotten so much that you don’t remember anything you ever knew or felt or even heard about love?’ (274-75)

人間社会の中で普遍的に存在する愛の意識を、Issacは野生の中で体験しているものの、彼の祖先の原罪に苦しんできた実生活の中では愛は存在しなかったのである。自然の中に帰り、生きることを選択したIssacは、自然の中に逃げ込むことしかできなかった弱くて脆い男であったといえる。しかし、Ikeも世の中の変化を感じてはいたのである。“*Maybe in a thousand or two thousand years in America,*” (272) と、人種差別の意識と実体とを問わない世の中がいつかは来ることを予想しているものの、彼にはそれを今受け入れる余

裕はない。“*But not now! Not now!*” (272) 憤慨し焦り叫ぶこのIssacは、時代の流れを意識しながらもこれを受け入れることができない。これを受け入れることができれば、祖先の犯した原罪に苦しむこともなかったのであろうが、老人Issacは、焦りを感じると共に、その思考は白人優勢主義、Paternalismの社会の域を超えることができなかった。白人男性の“space”に固執せざるを得ないIssacの潜在意識がこの女性に対して次のように伝える。

‘That’s right. Go Back North. Marry: a man in your own race. That’s the only salvation for you--for a while yet, maybe a long while yet. We will have to wait. Marry a black man. You are young, handsome, almost white; you could find a black man who would see in you what it was you saw in him, who would ask nothing of you and expect less and get even still less than that, if it’s revenge you want. Then you will forget all this, forget it ever happened, that he ever existed -’ (274)

しかし、Issacは自らの潜在意識とも闘い、社会的矛盾に抵抗しようする意欲とも闘っていた。

This Delta. This land which man has deswamped and denuded and derivered in two generations so that white men can own plantations and commute every night to Memphis and black men own plantations and ride in jim crow cars to Chicago to live in millionaires’ mansions on Lakeshore Drive, where white men rent farms and live like niggers and niggers crop on shares and live like animals, where cotton is planted and grows man-tall in the very cracks of the sidewalks, and usury and mortgage and bankruptcy and measureless wealth, Chinese and African and Aryan and Jew, all breed and spawn together until no man has time to say which one is which nor cares.... (275)

自分の呪っていた原罪は、この社会の中で生まれた。RothもそしてまたLucasもこの社会的矛盾の中で苦しみ葛藤していきながら、これから逃れていく力もなく、またその術をも知らない。呪われたこの土地、Paternalism社会の桎梏の下でしか生きられない男たちの中で、すでに“space”を越えて暮らして、それを自らの“space”に組み込んだ黒人女性像は、南部作家Faulknerの、個人的生活が生んだ一つの女性観であると言えよう。

さらに注目されることの一つは、南部Paternalism社会の枠を越えてゆこうとする新しい南部を予感させる女性像への言及である。Mollieの育てたRothの子の母となったこの女性こそ、未来のデルタ像を導くべく新しい女性と考えられる。Faulknerは、この女性の名前

を最後まで明らかにしていないが、未来への希望を予告するようなこの女性の登場で作品を終わらせなかったのである。この女性を複写し、実体化すると考えられるように、Faulkner は、*Go Down, Moses* を締めくくる物語として Mollie を再び登場させているのである。罪深い南部を見守りそして支えてきた Mammy には、社会を導いていく力は残っていない。しかしながら一生を通じて示してきた彼女の “space” への流動性が語ることで、旧世界にもそして新しい世界にも必要とされる人間像であることを、我々に訴えているのかもしれない。

註

- 1 Joseph Blotner (ed.), *Selected Letters of William Faulkner* (New York: Vintage Books, 1978), p. 124.
- 2 *Ibid.*, p. 135.
- 3 *Ibid.*, pp. 139-40.
- 4 *Ibid.*, p. 139.
- 5 *Go Down, Moses* の “The Fire and the Hearth” では Molly と、“Go Down, Moses” では Mollie と表記されている。同一人物であるがこのように異なった綴りで表されていることに対して様々な考え方があがるが、*Go Down, Moses* が Faulkner の Black Mammy, Callie に捧げられたことに注目し、小論においてはその綴りとの共通点を持つ、“Mollie” に統一することにする。
- 6 William Faulkner, “That Evening Sun,” in *These Thirteen, Volume Two of the Collected Short Stories of William Faulkner* (London: Cahtto & Windus, 1958), p. 58.
- 7 William Faulkner, *Go Down, Moses* (New York: Penguin Books Ltd., 1985), p. 60. この作品への引用及び言及は、すべてこの版に基づくこととし、以後、括弧内に頁数を示す。
- 8 William Van O'Connor, “The Wilderness Theme in Faulkner’s ‘The Bear’” in *William Faulkner: Three Decades of Criticism*, Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery (eds.), (Michigan: Michigan State University Press, 1960), p. 323.
- 9 Judith L. Sensibar, “Who Wears the Mask? Memory, Desire, and Race in *Go Down, Moses*” in *New Essays on Go Down, Moses*, Linda Wagner-Martin (ed.), (New York: Cambridge Univ. Press, 1996), p. 106.